

# 都市編成と「植民地なき植民地主義」

加藤政洋

## 1. はしがき

2005年10月末、パリ郊外のクリシースボワからフランスの全土に拡大した若者たちによる一連の「暴動」は、メディアを通じて流通した炎上する車の映像とともに、記憶に新しい。この事件は日本でも大きな関心呼び、発生当初の速報的な論評から、移民国家の社会構造的な問題を詳述する学術書にいたるまで<sup>1)</sup>、これまで多くの議論が積み重ねられている。郊外の団地に押し込められた若者たちの行動が社会の分断を浮き彫りにしたことで、あらためて都市の社会関係-空間構造について考えさせられる出来事となった。

グローバル化時代の新しい植民地主義を問う西川長夫は、近著のなかで「第三世界は郊外に始まる」というサルトル (2000: 228-233) の題目を引きつつ<sup>2)</sup>、この「暴動」が持つ「反グローバル化運動の側面」を指摘している (西川 2006: 30, 55)。注目すべきは、彼が植民地主義を生産する構図を国民国家の内部に見いだし、「郊外」の「暴動」をまさにその文脈で捉え返している点である。この西川の視角から図らずもわたしが想起したのは、今から約40年も前に、フランスの哲学者アンリ・ルフェーブル (1901-1991) が提起した都市論であった。

## 2. 「〈新〉植民地主義」論に関する個人的備忘録

近年の都市論では、都市的なるものの構制を空間編成から解き明かす方向性が明確となっている。(一般に「空間論的転回」と呼ばれる) この新しい動向に大きな影響を及ぼしつつづけているのが、1980年代以降、急速かつ広範に読み直し(再評価)の進んだルフェーブルの議論、なかんずく空間論であった。そのルフェーブルが、1968年5月の「事件と状況」を踏まえ、以下のように述べていたことを、わたしは西川の著作からふと思い出したのである。

……いくつかの地方、いくつかの集団(青年層)、諸階級のなかのいくつかの部分(労働者あるいは農民)が、植民地化されていることを見出すのである。誰によって? 決定の中心、権力の中心、富の蓄積の中心、都市の中心あるいはむしろ都市現実の破碎の途上において構成される諸々の中心によってである。逆説的にも、新=資本主義による搾取は、このような国内的植民地化という色彩を持つに至った。意識化が、この途の後をおそう。組織の資本主義は、いまや首都のなかに植民地を持つのであり、たとえ国内市場に賭けるとしても、それは植民地的方式でそれを利用するためなのである。生産者としての生産者や消費者としての消費者の二重の搾取は、植民地的経験を元植民者の民衆のただなかへと移行させるのだ。このような世界的なるものの国家的なるものへの反響は、多様な形態を取る。

首都の住民は、諸々のゲットー（郊外、外国人、工場、学生）へとまとめ直されるのであって、新しい都市にはどこか植民地都市を想起させるところがある。（ルフェーブル 1969b: 112）

この文章が書かれる前年（1967年）、すでにルフェーブルは「こんにち、諸々の決定の中心になることによって、あるいはむしろ決定の諸中心を寄せ集めることによって、現代都市は、社会全体の（たんに労働者階級のみならず、非支配者的な他の諸々の社会階級の）搾取を組織することによって、その搾取を強化している」（1969a: 87）と指摘し、首都の中枢性が有する権力への注意を喚起していた。そして、1968年5月の出来事を目の当たりにすることで、「新=資本主義による搾取」を国内・都市内における「植民地主義」として、いっそう強く認識するにいたったことがうかがわれる。

ルフェーブルにとって、「五月革命」と称される社会的爆発は、階級関係のみならず「(半)植民地化」された集団ないし場所を説明変数として組み込むことでしか、理解のできない現象であった。

沸騰や自然発生性が、フランスにおいては、二組の社会現象、すなわち生産のなかにおける旧来の亀裂（社会的階級や地位や職分）への参照によって測定しうる社会現象と、他の参照（権力の中心に従属する諸領域に配分された半=植民地化されていたりあるいはそのように自分を感じている諸集団、すなわちゲットー、郊外、周辺、青年層、学生）によってしか理解し得ない社会現象との重なり合いによるものであるということがありうる。（ルフェーブル 1969b: 114-115）

地理学者のデイヴィド・ハーヴェイは、史的唯物論における空間（論）——地理的差異の問題——の不在を厳しく指摘するなかで、たとえば「ある一つの場所の人々が別の場所の人々を搾取したりそれと闘争したりする、という考え方で、一つの階級が他の階級によって搾取されることによって資本主義のダイナミクスが動かされる、というマルクスの見地とは、いったいどうしたら両立する」のかと既存の理論（家たち）に問い、その「両立」を可能にするのが資本主義的な空間の生産であること——資本主義の歴史地理を理論化の対象とする史的・地理的唯物論の必要性——を主張する（ハーヴェイ 1991: 5-7）。

ハーヴェイの言う「一つの場所」をルフェーブルの言葉——「権力の中心」ないし「決定の（都市的）諸中枢」（ルフェーブル 1974: 58）——に置き換えてみれば、ルフェーブルが階級ならびにローカルからグローバルにいたる中枢-周辺という二重の社会（空間）現象のなかで五月革命を理解しようとしていたことは明らかであるし、彼もまた「空間」への問いを開始したのである。知られるように、この後、彼は次のような都市の中枢性をめぐる議論（『都市革命』1970年）を経て、「空間の生産」論（『空間と政治』1972年、『空間の生産』1974年）へと進んだ。

……《決定中枢》による空間の全般的な植民地化のようなものが、明確になってくるよう

に思われる。富、情報、知、権力の中枢が、それらの従属地の封建化に着手するであろう。この場合、国境線は都市と田舎のあいだをとおらず、都市現象内部における支配された周辺と支配する中枢とのあいだをとおるのである。(ルフェーブル 1974: 141)

『都市への権利』(1968年)で主張されていたように、都市はもはや生産や資本が集中するだけの場所=受け皿ではない。それは、資本が(中枢-周辺といった)空間編成を生産する主要な拠点=装置となる。たとえば「《決定中枢》による空間の全般的な植民地化」は、『空間と政治』において、次のように表現されている。

首都は、人間、頭脳、富、なんでも自分のまわりにひきよせてしまいます。それは決定と意思の中枢なのです。パリの周辺には従属的な階層化された空間がひろがっています。これらの空間はパリによって支配されると同時に搾取されているのです。帝国主義者としてのフランスはその植民地を失いましたが、国内における新-植民主義が打ち立てられつつあります。現在のフランスは過度に開発され、過度に工業化され、過度に都市化された地帯を含みこんでいます。けれども一方では、ことにブルターニュや南部に、低開発地帯の数がどんどんふえつつあることも忘れてはなりません。(ルフェーブル 1975: 155-156)

1968年の事件と状況から透かし見るように、ルフェーブルは国内の植民地を発見していた。首都と地方の対比が許されるのであれば、(周辺に位置する)地方に形成される国内植民地、そして首都それ自体もまた内部に植民地を抱える、つまり諸々の空間を植民地化する「植民地都市」であった。後者の場合、都市編成は種々のゲットーの布置として生産される。このことは、帝国主義時代の植民地化の経験が単に国内に持ち帰られたことを意味するのではない。植民地化の主体は、もはや国家ばかりでなく、資本ないし組織化の新しい資本主義なのである。ルフェーブル自身がこの言葉を使うことはおそろくなかったけれども、これは西川長夫の言う「植民地なき植民主義」、すなわち「領域的な支配(占領, 入植)」を前提としない「(新)植民主義」に他ならない(西川 2006: 50)。植民地化する主体が変質しつつある資本であることをはっきりと指摘し、国内植民地とグローバル・シティ(ルフェーブルの場合は首都)に注目する点でも両者は一致しているが(西川 2006: 44-56)、それもまたおそらく偶然ではあるまい。ハーヴェイが主張するように、それは資本主義の空間経済が有する構造的側面だからである。ルフェーブルの観察から三十数年の歳月を経て、今このタイミングで「(新)植民主義論」が提起されたのは、より広い文脈——グローバル化時代の都市変容——のなかで「都市が本来的にもっている植民地性」(西川 2006: 25)が、いっそうはっきりとその姿を浮かび上がらせてきたからである。

### 3. 都市編成の生産

ルフェーブルが「植民地なき植民主義」としての新植民主義を指摘する際に素描した様態のひとつは、中枢の周辺に従属的に配置され、階層化された場所や集団からなる都市編成で

あった。ここでは空間的な中心-周辺という、きわめて単純な都市的布置が前提されている。振り返ってみれば、「周辺」の内実はともかく、このような空間形態は都市の再編期にさまざまな論者たちが発見し、言及してきたものである。

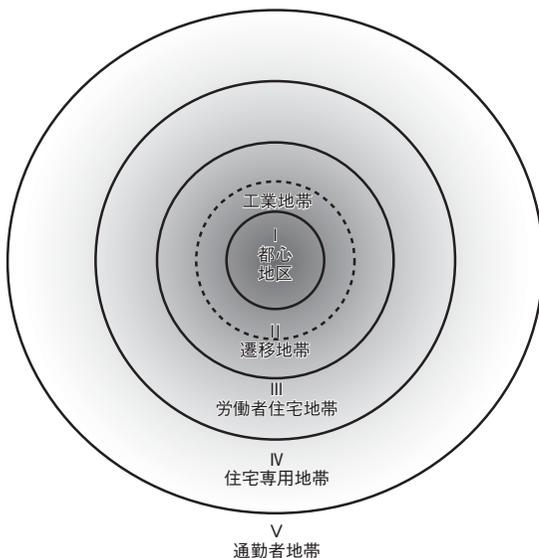
たとえば、フリードリヒ・エンゲルスは、『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年）のなかで、マンチェスターの同心円的な社会-空間構造を次のように叙述している。

マンチェスターの中心には、縦も横も半マイルほどのかなり広い商業地区があり、ここにはほとんど事務所と倉庫だけしかない。この地区全体にはほとんど人は住んでおらず、夜になると淋しくがらんとしている……。この商業地区を例外として、本来のマンチェスター全体……はすべて純粋な労働者地区であって、平均一マイル半の広い帯状になって商業地区をとりかこんでいる。その外側、つまりこの帯状のところの向こう側には、上流中流のブルジョアジーが住んでいる——中流のブルジョアジーは労働者地区の近くの整然とした街路に……住んでおり、上流のブルジョアジーは……町からはなれた別荘風の庭付きの家か……広々とした健康的な農村の空気の中で、三〇分か一五分おきに町へ向かう乗合馬車がそばをとおる立派な、快適な住宅に住んでいる。しかもたいへん都合なことに、これらの富裕な貨幣貴族たちは、いちばん近道をして全労働者地区の真ん中をとおって市の中心部にある自分の事務所へいきながら、左右に見られるはずの、もっとも不潔な困窮状態の近くをとおっていることに気づかずにすむのである。（エンゲルス 2000: 上81, 82）

エンゲルスの記述は、社会・経済組織の変化に合わせて高度に専門化した都市的土地利用を見事に描き出す<sup>3)</sup>。商業目的の空間利用に対する需要が増大し居住者のいなくなった都心、居住密度の低い自然にあふれた田園生活を謳歌する富裕層の郊外、その中間にあつて職住近接のために集住せざるを得ない労働者階級のインナーシティ。知られるように、それから80年後、シ

カゴ学派のバージェスは、やはり都市の発展と内部構造に関する同心円地帯論 concentric zone model を構築した。

図に示されるように、経済・文化・政治活動の一点集中と高層化が顕著である中心業務地区 Loop (= 第 I 地帯) から、ビジネスや軽工業によって侵食されている遷移地帯 zone in transition (= 第 II 地帯)、(第 II 地帯から抜け出したものの) 職場へのアクセスを重視する(工業労働)者たちの住区である勤労者住宅地帯 zone of workingman's homes (= 第 III 地帯)、そして高級アパートや一戸建てからなる住宅専用地帯 residential zone (= 第 IV 地帯) を経て、



都市外縁の郊外住宅地ないし衛星都市である通勤者地帯 *commuters zone* (= 第V地帯) へと同心円状に広がる都市構造, それがバージェスのモデルである。有名なのは第II地帯, シカゴ学派のフィールドワークの舞台としての遷移地帯であった。モデルを考案したバージェスは, この地帯を次のように描写している。

中心業務地区を取り囲んでいる頽廢的地帯には, 貧困, 墮落, 疾病などが氾濫している地域や犯罪と悪徳のどん底社会のある, いわゆる「スラム」や「暗黒街 *bad lands*」が存在している。頽廢的地域の内部には, 下宿屋地区や「失われた魂」の煉獄がある。そのそばには, 進取的, 反抗的な精神の根城であるラテン地区がある。スラムではまた古い母国社会の諸遺産とアメリカへの諸適応とが奇妙に結びついた多くの移民街——ユダヤ人街, リトル・シシリー, ギリシア人街, チャイナタウン——で, 人口が満ちあふれている。ここから押し出されたところに, 自由で無秩序な生活をしている黒人地帯 (*the Black Belts*) がある。頽廢的地域は, 本質的には腐敗の地域であり, また人口の停滞ないし衰退している地域であるが, 他方においてまた, 伝道区, セツルメント, 芸術家部落, 急進主義者センターの存在によって示されているように, 新しい, より良き社会のヴィジョンに満ちあふれた革新の地域でもある。(パークほか 1972: 57)

国の内外から流入する移民を受け入れ, 人種・民族エンクレーヴを共在させる第二地帯——「都市とは, 複数の自然発生的地域 *natural areas* の布置であり, 各自然発生的地域は特有の環境をもち, 都市経済全体の中で特有の機能をはたす」(パーク 1986: 22) というのが, シカゴ学派の都市観であった。特定の民族エンクレーヴ——たとえば, ギリシア人街——を自然発生的地域と呼ぶのは, それらが何ら事前の目論みもなく発生し, 固有の機能を果たすと考えるからである。こうした前提のもとに, 都市発展の様式は以下のように概略される。すなわち,

……郊外とは, 明らかに都市コミュニティの単なる延長ではない。開けた平野へと拡がりつつある郊外はどれも, 他と区別されるひとつの特徴をもつ傾向にある。メトロポリスとは, 一見したところ, 方向変換と選別の巨大な機構のようだ。それは, 特定の地区と環境の中で暮らすのに最もふさわしい個人を, まだわれわれの理解が十分及ばないような方法で, 全人口の中からまちがいなく選び出す。都市が拡張すればするほど, 郊外は拡大し, 郊外としての特徴もはっきりしてくる。都市は, 拡大することによって成長するのに対し, 人々を選別・隔離することによってひとつの特徴を獲得する。その結果, 各個人は, 自分が生活できる場所, または生活せざるを得ない場所を, 結局見つけ出す。(パーク 1986: 22-23)

「単核を前提とする議論など, そもそも現代都市には当てはまらない」, という批判をここでは措くとしても, パークの議論は, 一見, 変化や諸過程を動的に捉えているように見えて, 実際には社会的な関係を介在させることなく, 都市の空間構成をそのまま社会の地理的なあらわれと見なすきらいがある——空間物神論の陥穽。この点を衝いてハーヴェイは, エンゲルス

が「彼ら〔シカゴ学派〕に先立つこと八十数年も前に、都市の同心円地帯化現象に注目し、しかもそれを経済的階級に関する概念を用いて説明しようとした」こと、そして「都市の空間構造を的確に洞察している」ことを強調し、学ぶべきはシカゴ学派ではなく、エンゲルスであると主張したのだった（ハーヴェイ 1980: 172）。

学派とその流れを汲む社会学者たちが残した豊かで厚みのあるモノグラフとは裏腹に、その都市形態論からひとつ抜け落ちていたのは、ルフェーブルの言う中枢性に関する認識だったのかもしれない。中枢は、情報・資本・権力の集積点であり、グローバルなネットワークの結節点となるがゆえに、剰余価値の形成・実現・分配において重要な役割を果たす（ルフェーブル 1974: 35-36）。また、それを経済空間としてみれば、行政機関や企業が集中的に立地する——それゆえ雇用／就業の機会が大量に発生する——場所であると同時に、消費を編成する空間ともなる（ルフェーブルの言う「二重の搾取」）。都心とその周辺には商業的・工業的な土地利用を通じて、生産／労働の空間が創出され、さらにそうした雇用が発生し、就業の機会が集積する場所の周囲には、住宅が凝集し、多様に分化した住宅地が形成されるのだ。単純化して捉えるならば、産業資本主義以降の都市は、このように「生産空間」と「社会空間」からなるひとつの空間編成として生産されてきた（スコット 1996）。

社会空間を重視するシカゴ学派の伝統に対し、生産空間に重きを置いて都市論を展開しているのが、地理学者のアラン・スコットやエドワード・ソジャに代表されるロサンゼルス学派である（加藤 2004）。彼らは「社会的に分化した近隣住区やコミュニティの精巧なモザイク」をなす社会空間を、シカゴ学派のように「複数の自然発生的地域の布置」と見なしはしない。そうではなく、まさに社会空間の諸々の特徴のなかに、分業や局地的労働市場のはたらきが、はっきりと刻み込まれている、と考えるのである（スコット 1996: 251）。

社会空間の分化において、景観上の断層となってあらわれているのが、パークも部分的に示唆していた労働者階級向けのインナーエリアとホワイトカラー向けのアウトターエリアとして二分された住宅地帯であろう。職場で成立する職種の違い——ブルーカラーとホワイトカラーの分業——が、完全とはいえないまでも選択された住宅立地の明確な違いとなって、都市空間のなかにその姿を再びあらわすのである。「ブルジョア・ユートピア」とも位置づけられた郊外は（フィッシュマン 1990）、外破 blow-out とインナーエリアからの空間的回避 spatial fix という二つの側面を持ち合わせながら生産された空間であった。この意味において、「郊外化とは資本主義的生産様式のきわめて特殊な創造物」（ハーヴェイ 1991: 165）と見なすこともできる。

人だけにはとどまらないモノや富、情報や知識、その他剰余の極大の集中・集積は、一方で郊外化を含む領域の拡大をともないながら、都市の「内破-外破」をもたらした（ルフェーブル 1974）。階層、エスニシティ、ジェンダー、ライフステージなどに応じて住宅地区は断片化されながらも、中心部を取り囲むようにその布置が編成されている。パークが述べるように、都市は凝集と分離を同時に達成する機械であるが、もっと重要なのは外部を内側に取り込むこと、それは都市-農村（田舎）といった対立を止揚し、両者のあいだに横たわる構造的な問題や矛盾、格差までも内面化することにある<sup>4)</sup>。農村の都市化とともに起こる都市の農村化、こうしたルフェーブルの考え方にもとづくならば、「都市の貧困は、大部分が、都市システムの中で再形成された農村の貧困である」（ハーヴェイ 1980: 410）という言い方も正鵠を得ていよう。

西川長夫はグローバル化時代の都市のありようについて、シカゴ学派を、あるいはジョナサン・ラバンの『ソフト・シティ』を思わせるような手つきで、次のように描写している。

グローバル・シティには多数の多国籍企業が集まり、世界の多国籍企業のネットが結ばれる結節点であり、そこには資本や権力が集中しています。グローバル・シティは世界の資本に開かれた都市ですが、それは同時に世界の移民労働者に開かれた都市でもあります。ニューヨークの崩壊した世界貿易センタービルに七十四ヶ国の国籍をもった人々が働いていたのはたいそう象徴的です。世界資本主義はもはや植民地という辺境の地に赴く必要はなく、辺境の地から労働者を宗主国の中心部に迎え入れるのです。こうしてグローバル・シティには黒人街、アラブ人街、中国人街、日本人街、コリアン人街、イタリア人街、ギリシャ人街、ポーランド人街、スペイン人街、メキシコ人街、等々、さまざまなエスニック集団が存在し、ときには治外法権的な外観を呈することがあります。私はそれを「逆租界」現象と呼んだことがあります。グローバル・シティは一種の植民地である、と言うことができるかもしれません。(西川 2006: 54-55)

都市が外部をその内に取り込むことを指してルフェーブルが言った都市の農村化は、今や第三世界化にもとどまりはしない。まさに、それはグローバル化そのものである。西川は、この引用につづいて、「グローバル・シティはグローバル化から排除されたさまざまな要素をその周辺に押し出し、敵対的な周辺部と郊外都市が形成される」(西川 2006: 55)と述べる。人びとを惹き付けてやまない磁場でありながら、いったん引き寄せられた人びとは社会空間的分化を通じて、結果として「中枢性とその運動」からは「排除」されてしまうのだ。ルフェーブル(1974: 186)が「都市への権利」を中枢性への関わり方と見定めたのは、そのためである。

#### 4. グローバル化時代の都市変容

文化研究者のステュアート・ホールは、工業経済-社会から脱工業化(サービス・情報)経済-社会への不均等な移行、多国籍企業や金融フローを基盤とするグローバル化、そして移民という三つの要因によって、新しいタイプの都市編成 urban configuration——グローバル/多文化型都市——が登場してきたことを論じている(Hall 2006)。ロンドンその他の大都市の社会・空間編成を組み替え、新たな社会・空間分割をつくりだす構造力学としてホールが重視したのは、グローバル化と移民であった。彼自身の関心は、移民の必然的な帰結である民族・社会・文化の多様性が、現代都市景観の表層をどのように塗り替え、グローバル都市に固有の社会的な分割・軋轢を再編成しているのか、という点にあるのだが、近年の都市研究は産業構造(の転換)との関わりをもう少し重視している。

たとえば、社会学者のサスキア・サッセンがニューヨークのサービス部門労働市場の分析から明らかにするように(Sassen 2001)、大都市中枢において高賃金の職種が増大する一方、低賃金の未熟練労働力の需要も高まっている。あるいは、ロサンゼルス学派の一連の成果によると(Scott and Soja eds. 1996)、アメリカ都市においては、たしかに「脱工業化」(なかでも、大規模

かつ垂直に統合された組立ラインからなる大量生産工場の斜陽)がつづいている一方、ロサンゼルスでは膨大なアンドキュメンティッドの労働者に依存した苦汗工場を基盤とする製造業、ならびにハイテク産業とが同時に興隆(=再工業化)しており、その結果、労働市場の中間層は空洞化し、逆に所得規模の最高部と最低部の双方が膨脹するという「砂時計型経済 hourglass economy」が出現した。分業形態における二極化は、武装した守衛や高い壁で防御された郊外のゲイテッド・コミュニティ、住宅の払底にともなうインナーシティの過密な居住環境、そしてダウンタウンの要塞化する建造物とその周囲にひろがる「絶望の景観」などに映し出されることになる<sup>5)</sup>。都市の有するこのような二元性を指して、二重都市 dual city という言葉が使われるようになって久しい。

再中心化(高度な情報・サービス業の集積)と郊外化・分散化(新たな産業の勃興)が複合的かつ同時に起こる過程は、たしかに大都市内部の社会地理に変化をもたらしている。ホールもまた空洞化した都心周辺を埋め合わせるように流入してくる移民の集住地区が、ひとたび「ジェントリフィケーション」の波にさらされると、空間的にも市場においても周辺部に追いやられ「ニッチの搾取の場」になることを指摘する。1964年に社会学者のルース・グラスがロンドンの空間変容の一面を捉えて「ジェントリフィケーション」と名づけて以来、この現象はさまざまな都市を対象にいくつかの視点から研究されてきたが(スミス 2005)、ホール自身は、移民の立ち退きとそれにつづく都市空間と地元市場における周辺化というジェントリフィケーションの負の過程を、はっきりと「遷移地帯」の植民地化と位置づけるにいたった。

こうした異・他なるものが共在し、ときには場や文化をめぐってせめぎ合いが起こる都市空間に、新しい産業構造は立脚している。

これら異質な諸世界(ハイテク世界、突端的サービス世界、補助サービス世界、多様な移民世界、旧来の黒人ゲトー、保護された中産階級的郊外、等々)は、そのダイナミクスの点では個々独自の方向で展開しながら、全体として新しい超巨大都市の錯綜した描像をもたらしている。新労働市場は、この新規に登場した分極的な社会空間構造を基礎にしている。われわれが目撃しているものこそ、双対的に二元化した巨大都市の出現であり、この双対的の二元化都市はその内部に諸活動、社会集団、文化を凝離化させつつ、構造的相互依存性によって再結合している。(カステル 1999: 214)

たんに二元的というよりも、場合によっては分裂都市 divided city といった方が適切にさえ思える現代都市の景観のなかで、「(半)植民地化」された集団ないし場所が「中枢性とその運動」から「排除」されている状況は、ルフェーブの観察以来、変わらないままなのだろうか。

## 5. 都市圏の文化地政学

グローバル化ならびにグローバル化する資本の中枢・拠点となった都市は、そのシステムのなかでイデオロギー的・政治的役割も果たす。ハーヴェイが繰り返し指摘してきたのは、今や都市はよりいっそう競争的、そして企業家的にならざるを得ず、生き残りをかけて、①商品や

サービスの生産力の改善, ② 消費空間の生産——娯楽・文化・観光の中心としての都市の経済的意義の強化, 適切なインフラストラクチュア(ホテル, 公園, 文化センター, 娯楽施設, ショッピング・モール)の整備, 「生活の質」への配慮(歴史・文化・自然の遺産, 舞台イベントなど)——, ③ 管理中枢機能の強化——空港, 高速通信機器, オフィスビル, あらゆる種類のビジネスサービスの供給, ④ 資産・収入の分配の改善といった選択肢を駆使する。

時間-空間の圧縮ないし時間による空間の絶滅の追求によって(一見)空間が無化されたかのように見える現在, 場所とそのイメージはこれまで以上に重要となる。都市が雇用, 投資, イノベーション, 資源, 居住者・来訪者, そして権力と影響力の行使をめぐって他都市とせめぎ合うなかで, 都市内部の特定の空間にさまざまな力が作用することになる。場合によっては, そうした場所が都市全体の経済に資することもあるだろうし, 来訪者にも認識されやすい有名性を獲得することもあるだろう。

場所placeが, 都市空間の政治経済的な力と文化社会的な力の双方が作用する焦点となったことで, 1990年代以降の地理学では「場所の文化政治cultural politics of place」が盛んに論じられるようになった。それは, 場所の再現=表象を, 構造的な社会的<sup>リプレゼンテーション</sup>不平等との関係で理解されるべき文化的実践と位置づけ, それがまた必然的にイデオロギーの問題であることを指摘し(イデオロギーは, 支配的な社会集団による意味の領有を指し示し, この言説上の自然化のプロセスがその抑圧的な社会的関係を隠蔽することによって社会的ヒエラルキーを正当化する), 再現=表象の実践を権力関係との関連から問う視角である。この観点からすると, 一見「自然に形成された」と思われる「場所」も, 実はさまざまな意図が絡み合い, 政治的な力関係に左右されながら創出されたものであることが明らかになる。

しかし, 個別の場所にまつわる文化政治が都市空間の再編や管理にまつわる, いわば「空間の政治」とも密接に関係していることは言うまでもない。望むと望まないにかかわらず, グローバル化時代の「権力の幾何学」(マッシー 2002)に組み込まれた都市地域は, 都市圏全体を俯瞰しつつ, より有効に場所の更新や部分的な空間の組み換えを通じて対応しようとする。行政域を超えて都市圏全体にまたがる場所イメージの刷新とその空間的布置を調整しようとする力学が作用しているという点で, これを大都市圏の文化地政学と呼ぼう。

都市史のなかで, 場所(イメージ)の刷新のために取られてきた手段, 古くはたとえば次のように描写される。

陋屋が集まる地区が取り壊され, 銀行やデパート等のための御殿が建てられ, 取引用の往来や豪華馬車のために道路が拡張され, 鉄道馬車が敷設されるといった, 富の進歩にとまなう都市の「改良」によって, 貧者がますます劣悪で, 密集した片隅へと追いやられていくことは一目瞭然である。(マルクス 2005: 419)

もう少しだけ現代の都市的文脈に近づけるならば, ルフェーブルが『都市革命』のなかで「ここ数年来進んでいる」と指摘した, 「郊外や伝統的なブルジョアジーの地区にあからさまな不快感を示した富裕な階級の中核への回帰, 露骨なことばでいえば生産から切り離された都市中核の《エリートの》ブルジョア化」(1974: 184)を挙げることもできよう。新しい居住者が自

らのライフスタイルにふさわしい、快適な消費生活を志向することによって、公共性の高い空間までもがその装いを変えていくこともある。このように社会地図を塗り替えるジェントリフィケーションをスチュアート・ホールは「植民地化」として捉えたのだった。

仮に都市内部の各場所もまた、グローバルな空間諸関係のなかに埋め込まれているとするならば、じわりじわりと、しかし確実に改変されている<sup>ストリート</sup>街頭の風景から都市の文化地政学的カルトグラフィを読み解き、グローバル化の過程がもたらすインパクトを問うことも可能であるだろう。

## 6. むすび

ここまでの議論で、わたしがつねに念頭に置かざるを得なかったのは、もっとも身近な都市である大阪（大都市圏）であった。上に見た状況がそのまま大阪にもあてはまる、というのではない。そうではなく、たとえば大阪の都市編成のなかに「都市が本来的にもっている植民地性」（西川 2006: 25）がどのように構造化されているのか、という問いを新たに立てることで、これまでわたし自身の取り組んできた研究が、その根底から批判的に書き換えられる可能性を感じるのである。西日本の中核であると同時に、朝鮮半島を含む植民地への開口部であった、モダン大阪とその都市編成における植民地性を考えてみること——「東洋のマンチェスター」という代名詞に隠れて、実に「東洋のシカゴ」と呼ぶにふさわしい社会空間を構成していた（福本 2005: 228; 水内 2003, 2006）大阪における植民地主義の様態を浮き彫りにする作業が必要である。このことは、ポストバブル期の都市再編——震災とそこからの部分的な復興を経験した神戸はいっそう顕著であった——が、それまでの脱工業化の趨勢とあいまって、「東洋のシカゴ」の残影という言葉以上に遺制を剥き出しにしつつある現在を照射することにもなる。都市全域を「神の目」で観察することなどおよそ不可能であろうから、大都市圏レベルの文化地政学のなかで新たに圧力にさらされている（空洞化した、老朽化した、ゲトー化した、<sup>ジェントリファイ</sup>紳士化／<sup>ビュアリファイ</sup>浄化される……）場所に注目する必要がある。

あるいは、グローバル化との関連で捉え返してみるとどうだろうか。グローバル都市論には、グローバルな階梯における都市のランキングへの関心が根強くあるが、大阪の場合、都市規模のわりには（主として経済活動における）他都市・他所との相互連関linkageは薄弱で「ローカルな大都市」の域を出ない（加茂 2005）。国内においても、高速交通機関の発達によって東京－大阪を中心とする二つの経済圏——双眼構造——が瓦解し、二重の空洞化（製造部門／本社機能の流出）が進行する今日、卓抜する中枢性（東京）もなく、磐石の産業基盤（愛知・神奈川）もない大阪は、その政治経済地理的ポジションもきわめて曖昧である。それでもなお、例外なくどの都市も他の都市・地域との関係のなかに埋め込まれ、その諸関係を通じてグローバルな空間的コンテクストのなかに布置されているとするならば、「グローバル化のなかで都市はいかに変容しつつあるのか」<sup>6)</sup> という問いは、ここでも有効であると思われる。グローバル都市・東京への一極集中は、大阪をはじめとする他の（大）都市圏に対して確実に影響を及ぼしている。都市システムの階梯を一段降りることによって生じる空間変容も見逃すわけにはいかない。

では、一段どころか、それ以上の段数を降りたかもしれない大阪大都市圏の空間変容には、

どのような特徴があるのだろうか。都市圏の核としての主要ターミナル周辺には閉鎖的な消費の殿堂が構築され、歴史的コアもまた産業の構造転換にともない(新しいエスノスケープを含む)消費空間化が進む。その歴史的コアのフリンジ(インナーエリア内側)に目を移せば、「戦後」を決算しようとするかのように闇市の跡や住宅密集地区、そして工場の跡地が再開発され、都心回帰を誇示するようなタワー型の超高層マンションが建つ。郊外に目を転じると、ニュータウンや公営住宅のオールドタウン化が懸念されるなかで、ハイセキュリティの閉鎖型コミュニティ——通称セキュリティタウン——も登場しはじめた。一様に拡大してきた郊外空間が、ほころびを見せはじめている。

大阪の郊外であるとはいえ、れっきとした中心都市である神戸では、空洞化を埋め合わせるかのように都心部にマンションが建ち、都心それ自体が大阪のベッドタウン化しているという側面もある。都心に回帰する一部富裕層の受け皿となることで<sup>7)</sup>、周辺における「快適性」やセキュリティの追求も高まり、ホールの指摘したジェントリフィケーションとしての植民地化が起こらないとも限らない(その徴候はすでにあらわれているのだが)。これに脱産業化が追い討ちをかけ、かつての工場地帯は格好の住宅地となった。生産空間から居住空間への組み換えは、単に当該地区の土地利用が変化するという以上に、周辺への影響が甚大である。近代以降に国の内外から集まった労働力を涵養してきたコミュニティが、地場の商業もろとも崩壊する。

再び都心とその周辺に目を転じれば、経済活動を支える言わば「都市の光」のなかに、野宿(労働)者の存在が浮かび上がってきた。国際集客都市を標榜する都市の足元で都市貧困現象が前景化している。精査する必要はあるが、就学援助率42.5%の足立区問題(佐野 2006)にも見られるように、特定の地区にはっきりとは見えないかたちで貧困状態が生じている可能性も否定できない。そうした社会的較差(格差)を場所間の差異、ときには景観の断層として剥き出しにするような、二重都市ないし分裂都市的な状況もグローバル化時代の都市の存在形態である。とはいえ、「〈新〉植民地主義のありよう」が都市空間のなかに認められるときでも、植民地支配を受けているという意識(や経験)がともなわれない可能性も高い。そうであるならば、「植民地なき植民地主義」からの脱却の糸口として、「都市への権利」(ルフェーブ 1969a; Harvey 2003, 2006)もまた再び議論の焦点となるだろう。

## 注

- 1) たとえば、「階級社会のゆくえ」として特集を組んだ『現代思想 2月臨時増刊』(青土社、2006年)や陣野俊史『フランス暴動——移民法とラップフランセ』(河出書房新社、2006年)などがある。その他に、いくつかの新聞記事も見られた。たとえば、「格差社会」の顕在化と見なす海老坂武の随想(『神戸新聞』2005年12月1日)や、1968年の学生運動とは対照的に「社会的な理想主義を掲げ」ることのない、「社会の中の不可視の存在が、可視化を求めた抗議」と位置づけるスラヴォイ・ジジェクのインタビュー記事(『朝日新聞』2006年1月1日)である。しかしながら、とりわけ印象的だったのは、社会人口誌の領野をはるかに超えて文明論を展開するようになった、日本でも著名のエマニュエル・トッドの発言である。彼は「フランス暴動 移民国家の「平等」の証し」と題する論評(『朝日新聞』2005年12月2日)で、「レボルト(反乱)を通じて政治的意思を実現する手法」を「伝統的に個人主義的な平等意識が強い仏社会には一種の固有文化ともいえる現象」と位置づけたのである。先の『現代思想』の特集で梁石日も指摘するように、この議論ではかつての植民地主義が見事に忘却されている。

- 2) ちなみに初出のタイトルは「資本主義諸国とその国内植民地」であったという。
- 3) より詳細には、フィッシュマン (1990: 86-118) を参照。フィッシュマンはエンゲルスがマンチェスターを「近代産業都市の古典的形態をすでに達成したものとして描いている」とするのに対し、逆にヴィクトリア朝 (1837-1901) 都市の「典型」(ノックス+ピンチ 2005: 23) という位置づけもある。
- 4) 原発の立地にはっきりと示されるように、大都市は空間的な「外部」も創出する。
- 5) 情報社会化と都市の空間変容を探究する社会学者のマニユエル・カステルは、都市ルネサンスと中心の排他的独占、多様化した郊外世界、都市的周辺性の現出する都心という空間性を踏まえ、ヨーロッパ都市に見られる二元性を以下のように描出する。

新たな周辺性が都市空間のあちこちにひろがっている。……新しい貧困、新しい周辺性による都市空間の占拠は、二つの形態をとる。一つは黙許されたゲトーとしてであり、そこでは取り残された人々が社会の主流からは目に触れないところで居住を許されるというわけである。もう一つは「ストリート・ピープル」(住所不定者)が都市の中心地域に表だって姿を現すという、危険な戦略であると同時に生存のためのテクニックである。(カステル, 1999: 236)

- 6) これは、立命館大学国際言語文化研究所主催の連続講座「グローバリゼーションと植民地主義」のパンフレットの言葉である。
- 7) ちなみに、日本政策投資銀行関西支店のレポート「地域効果から見た阪急・阪神統合への期待」(<http://www.dbj.go.jp/kansai/report/pdf/060609.pdf>) における「阪急と阪神が並走する阪神地区について、富裕層を多く含む沿線人口が増加基調にあり、地価も上昇傾向にある『魅力ある地域』」という指摘(『朝日新聞』2006年6月9日)を見れば、大手私鉄の経営統合もまた都市圏の文化地政学の一翼を担っていることがわかる。

## 主な参考文献

- エンゲルス, F. 著, 浜林正夫訳『イギリスにおける労働者階級の状態 (上・下)』新日本出版社, 2000年。
- 加藤政洋 (2004) : 「エドワード・ソジャとポストモダンの転回」『都市文化研究』第3号, 166-181頁。
- 加茂利男 (2005) : 『世界都市——「都市再生」の時代の中で——』有斐閣。
- 佐野眞一「ルポ下層社会—改革に棄てられた家族を見よ」(『文芸春秋』第84巻第5号, 2006年) 94-109頁。
- サルトル, J-P. 著, 鈴木道彦ほか訳 (2000) : 『植民地の問題』人文書院。
- スコット, A. 著, 水岡不二雄監訳『メトロポリス——分業から都市形態へ——』古今書院, 1996年。
- スコット, A. 著, 坂本秀和訳『グローバル・シティ・リージョンズ』ダイヤモンド社, 2004年。
- スミス, N. 著, 若松司訳 (2005) : 「ジェントリフィケーションは卑劣な言葉なのか」『現代思想』第33巻第5号, 121-141頁。
- 西川長夫 (2006) : 『〈新〉植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う——』平凡社。
- ノックス, P.・テイラー, P. 共編, 藤田直晴訳編『世界都市の論理』鹿島出版会, 1997年。
- ハーヴェイ, D. 著, 竹内啓一・松本正美訳 (1980) : 『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ。
- ハーヴェイ, D. 著, 水岡不二雄監訳 (1991) : 『都市の資本論——都市空間形成の歴史と理論——』青木書店。
- パーク, R. 著, 町村敬志訳 (1986) : 「社会的実験室としての都市」同『実験室としての都市——パーク社会学論文選——』御茶の水書房, 1986年。
- パーク, R. ほか著, 大道安次郎・倉田和四生共訳『都市——人間生態学とコミュニティ論——』鹿島出版会, 1972年。Robert E. Park, Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie, *The City*, The University of Chicago, 1925.

- フィッシュマン, R. 著, 小池和子訳 (1990) : 『ブルジョワ・ユートピア——郊外住宅地の盛衰——』勁草書房。
- マルクス, K. 著, 今村仁司ほか訳 (2005) : 『マルクス・コレクション V 資本論 第一巻①』筑摩書房。
- 宮島喬 (2006) : 『移民社会フランスの危機』岩波書店。
- ルフェーブル, H. 著, 森本和夫訳 (1969a) : 『都市への権利』筑摩書房。
- ルフェーブル, H. 著, 森本和夫訳 (1969b) : 『「五月革命」論 突入——ナンテールから絶頂へ——』筑摩書房。
- ルフェーブル, H. 著, 今井成美訳 (1974) : 『都市革命』晶文社。
- ルフェーブル, H. 著, 今井成美訳 (1975) : 『空間と政治』晶文社。
- Davis, M. *Ecology of fear: Los Angeles and the imagination of disaster*, Metropolitan Books, 1998.
- Hall, S., 'Cosmopolitan Promises, Multicultural Realities', in Scholar, R. ed., *Divided Cities*, Oxford University Press, 2006, pp. 20-51.
- Harvey, D. (2003) 'Can we build an urban utopia?', *The Times Higher* February 14 2003, pp. 18-19.
- Harvey, D. (2006) 'The Right to the City', in Scholar, R. ed., *Divided Cities*, Oxford University Press, 2006, pp. .
- Sassen, S. *The global city: New York, London, Tokyo* (2nd ed.), Princeton University Press, 2001.
- Scott, A. and Soja, E. eds., *The city: Los Angeles and urban theory at the end of the twentieth century*, University of California Press, 1996.

## 付記

本稿は第1回「国内植民地とグローバル・シティ」研究会(2006年6月30日, 於:立命館大学衣笠キャンパス 創思館)ならびに立命館大学国際言語文化研究所主催の連続講座「グローバリゼーションと植民主義」(2006年11月18日, 於:立命館大学衣笠キャンパス 創思館)で発表した内容にもとづいている。連続講座では, 大阪大都市圏の文化地政学を経験的に素描したが, これについてはより議論を深めたうえで稿をあらためて論じることにはしたい。

